

「夢を諦めない理由」

須藤 華花

(日本語日本文化学科 3 年)

「私の将来の夢は学校の先生になることです」。この言葉は、私が小学生の頃から言っていた言葉です。小学生の頃の私が、教員を目指すようになったきっかけは、当時の担任の影響が強かったと思います。小学 5、6 年生の時の担任は、とても明るい女性の方でした。私は、その先生の授業が、楽しくて面白かったので大好きでした。ある日、先生が教室で宿題ノートを確認している姿を見ました。私は友達と一緒に、先生に近づき、「字で誰のノートか分かるんですか？」と聞きました。先生は「分かるよ」と笑顔で言いました。それを聞いた私と友達は、先生が言っていることが本当なのか気になり、誰のノートなのか問題を出しました。すると先生は、すぐに生徒の名前を言い当てました。まだ、幼い私にとって、生徒の名前を字で当てる先生の姿はカッコよく映りました。この出来事が、小学生の頃の私に憧れの先生という認識を与え、この先生のようにになりたいと思い始めました。小学生の頃はただ漠然と、当時の先生のようにになりたいという思いで将来の夢を語っていたように思います。

中学校に進学した私はバスケット部に入部しました。2 年生の頃に顧問が変わり、優しい先生から厳しく熱血な先生に顧問が変わりました。新しい顧問の先生が考える練習はハードなものが多く、気になることがあると熱血指導が入りました。正直私は、練習がきついし、前の顧問のときよりも楽しくないと感じていました。また、この顧問のような教員には、絶対になりたくないとまで思うようになっていました。しかし、大会に勝てるようになったり、先生が部員一人一人に対して真剣に指導している姿をみて、ただ厳しいだけの先生ではないのかもしれないと感じるようになりました。3 年生になり、部活動を引退してから顧問があつた先生でよかったと感じることが多くありました。最後まで諦めないこと、粘り強く続ける力は部活動の中で身についた力だと思います。初めは、顧問のようににはなりたくないと思っていましたが、今では、顧問のように一人一人に真剣に向き合える人になりたいと思っています。

高校に進学した私は、今まで以上に進路について真剣に考える必要がありました。私はずっと教員を目指していたので、進路希望は教職課程がある大学と決めていました。ですが、高校で学んでいくうちに別の道を考えることもありました。初めから教員になると決めていたのに、大学受験が近づくと「本当にこのまま目指していいのか」「別の道もあるのではないか」と思うことが増えました。私は悩み

ながらも教職課程がある大学のオープンキャンパスに参加していました。そんなとき、恵泉女学園大学に出会いました。恵泉を見つけたのは母で「この大学、教職課程始めるって!」と教えてくれたのがきっかけでオープンキャンパスに行くことになりました。恵泉の説明を聞いて、教師と学生の距離が近く、学生一人一人と向き合ってくれる大学だと感じました。この「学生一人一人と向き合う」というのが、中学の顧問のようで、私はこの大学で学びたいと決めました。しかし、本当に教職課程が始まるのかという不安はありました。それを、ソフトボール部の顧問で国語を担当している先生に相談したことがあります。私は、もし教職がなかったらという質問に対して、「学校は変えずそのまま別の道を探そうと思います。」と答えました。この答えを聞いた先生は、「簡単に諦めるな、教職がないなら学校を変えるべき」だと真剣に伝えてくださいました。その言葉に、私は心を動かされました。ずっと目指してきていたはずの夢を軽く考えて、大学に教職がないなら諦めても良いかと考えていたのです。また、今まで出会ってきた先生方との思い出や言葉を忘れたふりをして、なかったことにしようとしていたのです。この言葉で私は、もう一度真剣に考え直そうと思いました。二度目のオープンキャンパスへ向かい、教職課程が確実に行われるか確認しました。そして確実に知った私は、顧問の先生にそのことを伝え教員を目指す新たな一歩として恵泉女学園大学に入学しました。

大学に入学し、教職課程を学び始めました。学び続けていくうちに、教職課程を取っていた仲間は別の道に進むため、教職から離れていきました。現在は私一人で教職を学んでいます。そのため、孤独感を感じたり、先生との一对一授業は緊張するだろうと思っていました。案の定、初めの頃は緊張も孤独感も感じていました。しかし、時間が経つにつれ、先生との一对一授業にも慣れ、先生方のあたたかい関わりのおかげで一人で頑張っていると思うことは少なくなっていました。私は恵泉だからこその学び方があると強く感じています。座学だけでなく、様々な場所に赴き、紙芝居の実演に参加させていただいたり、中学校の授業風景を見学させていただいたり、多くの経験を積む機会がありました。このように様々な場所で多くの体験ができるのは、恵泉ならではのと思っていますし、教職課程を履修している人数が少ないからこそ出来ることだとも感じています。この経験のおかげで、表現力が身についたり、実際の授業風景を見学することで生徒との関わり方、授業の作り方などを学ぶことが出来ました。

今年の七月、中・高等学校国語科の教員採用試験前倒し受験がありました。私は試験に備え、日々勉強に励み、参考書を片手に過去問と向き合う毎日に追われました。しかし、もちろん壁は高く、多くの難関が待ち受けていました。大学の授業も並行して受けているので教員試験の勉強だけでなく、一般科目の講義レポートに追われ睡眠を削る毎日が続いていました。募るのは焦りで「他の受験生はもっ

と勉強しているかもしれない。これでは、試験に落ちてしまう」と不安は膨れ上がり、自信は徐々に失われていきました。そんな私を先生方が教職ライブラリーまで様子を見に来てくださり、励まし、実際に丁寧に勉強に付き合ってくださいましたのです。このような時間や交わりがあったからこそ自信を取り戻すことができ、試験に向けて一層集中することができるようになりました。

緊張しきっていた私に先生方が用意してくださいました言葉のひとつひとつが今も心に響いています。そのたくさんの言葉の中の一つに、「一緒にほどよく頑張ろう」という言葉がありました。この言葉は、自分の限界を超えて頑張りすぎてしまう私の様子を見て、かけてくださったものでした。この言葉があったからこそ、万全の状態試験に臨めたように思います。教員採用試験の結果が出たのは夏休み期間。不安と共に結果を確認すると記されていたのは嬉しい結果でした。しかし教員採用試験はこれで終わりではなく、面接や小論文の試験が待っているため、まだ気を抜くことはできません。

私は沢山の経験の中で多くの人と関わりを持つ機会がありました。その関わった方たちは、みんな、私の夢を応援する・励ますような言葉をかけてくれました。その言葉一つ一つが私にとっては大切に、背中を押してくれる存在になっています。そして、私がここまで諦めずに進めたのは、様々な先生方との出会いや支えがあったからだと思います。今度は私が夢を叶えて、多くの子どもたちの夢や、背中を押せるような存在になりたいと思っています。これからも、先生方の励みや沢山の言葉を支えに小学生の頃からの夢であった教員を目指して頑張ります。

(11月24日)